

砕波帯の堆積層序：2024年能登半島地震隆起浜からの知見

Surf-zone sedimentology: Insights from the 2024 Noto Peninsula Earthquake in central Japan

*岡崎 浩子¹、由比 政年²、遠藤 徳孝²、鈴木 雄介³、榎田 真也²、二宮 順一²、有田 守⁵、二木 敬右⁴、今野 哲嗣³、原口 強^{6,3}

*Hiroko Okazaki¹, Masatoshi Yuhi², Noritaka Endo², Yusuke Suzuki³, Shinya Umeda², Junichi Ninomiya², Mamoru Arita⁵, Keisuke Futagi⁴, Tetsuji Konno³, Tsuyoshi Haraguchi^{6,3}

1. 公益財団法人 深田地質研究所、2. 金沢大学、3. 株式会社STROY、4. 北陸電力株式会社、5. 金沢工業大学、6. 東北大学

1. Fukada Geological Institute, 2. Kanazawa university, 3. STORY Inc., 4. Hokuriku Electric Power Company, 5. Kanazawa Institute of Technology, 6. Tohoku University

2024年1月1日、石川県で能登半島地震が発生し、沿岸部で約4mの隆起が起こった。調査地点である鹿磯海岸は、離岸堤のある中粒砂を主とするポケットビーチである。4mの隆起により海岸線は約150～250m前進し、かつての砕波帯が海面上に露出している。我々は鹿磯海岸において、隆起直前の砕波帯の波浪・流れ作用を記録する堆積構造を調査するため、沿岸方向100m、沖合方向130m、深さ1mの大規模トレンチ調査を実施した。鹿磯海岸で観察されたこの堆積層序は、海岸地形動態と動的堆積プロセスに関する新たな知見を提供する。

キーワード：砕波帯、堆積構造、能登半島地震、隆起

Keywords: surf zone, sedimentary structure, the Noto Peninsula Earthquake, uplift